大学生の進路選択の諸問題
——長野大学生の傾向を含めた検討——

Some Problems of How to Select the Occupation in Student Days

小 川 勝 一

Shoichi Ogawa

〔1〕は じ め に

1985年、我々は教育学、心理学研究者と協力して、「予備校生の進路選択に関する意識調査」(以下、「予備校生調査」と略称）を行った。その結果は、『大学進学研究』No.42（'86.3）およびNo.49（'87.3）において報告されている。

その後、87年7月に、「予備校生調査」の継続及び発展として、「大学生の進路選択に関する意識調査」を実施し、結果について検討を進めてきたところ、その集計結果がある程度まとまったので、中間的な報告を予定している。（『大学進学研究』に掲載予定）

ここではその報告をふまえながら、長野大学生の特徴を含めたかたちで、大学生の進路選択について検討を行いたい。

さて、「予備校生調査」はめまぐるしく変化する今日の受験生の気質や志向の全体的な特徴を把握する必要性と国立大学の共通一次試験の見直しといった動向の中で企画されたのであった。

その調査の枠組みは1976年から1977年にかけて行った日本教育学会入試制度検討委員会の高校生を対象とした進路選択についての意識調査（以下「高校生調査」と略称。結果は『大学入試制度の教育学的研究』東大出版会1983に収録）にもとづくものであった。

調査の原型である「高校生調査」は、共通一次テストがかなり強引なかたちで実施されようとしているのに対して、青年の人生選択の筋道を丁寧にたどり、解明を進めることがまず必要であり、その上で、青年の進路選択・発達を保障する制度として、入学試験制度の改革を考えていくべきだという立場で計画されたものであった。

「高校生調査」についての概括の一部を改めて紹介すると次の通りである。

1. 日本の青少年たちは、15歳を節目として、進学か就職か、全日制か定時制か、普通高校の中でも「進学校」かどうかなど、その将来への展望が、心理的にも、客観的な事実としても、大きく方向づけられ枠づけられている。
2. 高校3年段階での進路選択動機としては、進学・就職とも「興味・関心」が多く、その選択は自主的とされているが、その内容は自分の個性やそれを生かす社会的部署へと深く結びつけられたものよりも、高校入試の結果や学業成績などの外的与件を強く組み込んだ「興味・関心」、自主性である傾向が強い。
3. 選択意識を大きく左右する外的与件として、学業成績、それも特に中・高校の英語と数学の影響が大きい。
4. 高校3年間の生活は入学以来の偏差値によって枠づけられており、職業高校に入ったということで、将来の進路が客観的にも意識の上でも限定される一方、普通高校の多くでは、進学のための競い合いの学習を強いられる場合が多い。そのためか、全ての学校種別を通じて高校生活への不満度が高い。（『大学進学研究』No.42 1986年3月 p61）

さて、「予備校調査」の結果は、進路選択意識の面では、概略、次のような特徴を持っていた。

1. 対象が大学進学志望者に限定されたこともあ

って、進路選択意識の枠づけとしては高校段階での、主としてクラス、コース選択を契機とする文系・理系、国公立・私立という分化が顕著にあらわれてきている。そして、このクラス、コースは、将来の進路と結びついた生徒の個性的学習を実現する条件の類型というより、大学入試の科目の違いにあわせたものという側面を強く持っている。しかも、入学してわずか半年後には、多くの高校生はこのコース分けに直面することになっている点、共通一次の実施は国公立と私立の入試の違いを不必要なまでに強めたと思われる点を考えると、この枠づけ自体が多くの問題を含んでいると言わざるをえない。

2. 学業・教科の成績の進路選択に与える影響について、「高校生調査」では、普通科、職業科の選択にかかわって、中学時代の数学・英語の得意・不得意が選択を左右する大きな要因になっていた。ところが、高校入試を上位でクリアした者が多いと考えられる（すなわち、中学時代、数学・英語は一定の水準に達している)「予備校生調査」では、数・国・理・社の4教科の差が顕著である。4教科に対する文科と理科志望者の得意・不得意の差は、既に小学校時代からはっきりと現われている。教科の得意・不得意にもとづく、文科、理科への早期の分解と固定化現象が認められたのである。これについては、教科の得意・不得意がどのような体験を通じて形成され、それがどのようなプロセスと内容をもって、「文科」、「理科」という類型に定着していくかなどさらに検討すべき課題を残している。

3. 文科系、理科系の違いは、大学や学部の選択の仕方の差にも現われてきている。将来の職業などをある程度はっきりイメージして、大学で学ぶことへの興味・関心や大学の教育・研究内容などを考えて選択しているものは理系に多くみられる。これに対して文系では教師志望が多く専門職志向の強い国公立文系で、やや理系に近い傾向がみられるものの、私立文系では、「自由な時間が得られる」とか、「大学のカラー」「所在地の魅力」などが目につく。そのせいもあってか、志望学部の決定時期でも、志望大学の決定時期でも、文系、特に私立文系が最も遅れている。しかし、大学選択の考慮要因として、4類型の全てで、「興味・関心」につぐ項目は「教科・科目の得意不得意」「自分の成績と難易ランク」「進学先の試験科目」の三つが共通に占めている以上、成績偏差値や入試科目が文系・理系の違いを越えて決定的ともいえる強い影響を及ぼしていることは間違いない。

4. 高校生活の充実度が高い者ほど、自分の将来計画を含んで、「興味・関心」、「性格」といった自発的で目的意識的な要因を考慮して進路を選択する傾向がある。また、高校生活の充実度は「部活動」や「学校行事」「友達とのつきあい」など、多様なかたちでの友人との交流、自治的な世界への打ち込み度と関係している。

5. 予備校の授業や模試、進路情報への評価は高い。また、予備校に入ってから、志望の学部・学科や大学を変更している者はかなりの数にのぼる。それだけに予備校の影響力や役割も大きいといえる。また、受験勉強に焦点化した予備校での生活の中で内向的傾向や無気力な傾向も現われており、精神的健康状態についても留意する必要がある。

〔2〕「大学生の進路選択に関する意識調査」の構成と方法

① 質問紙の構成

質問紙は次の6つの部分から構成されている。

〈基礎調査〉：性別や学年、学部、家庭状況など

〔Ⅰ〕小学校以来の教科の得意・不得意及び職業志向

〔Ⅱ〕高校生活の様子

〔Ⅲ〕予備校生活の様子

〔Ⅳ〕大学・学部の決定に関与した要因

〔Ⅴ〕大学生活の様子及び今後の進路

〔Ⅵ〕将来の生き方

② 調査の時期と手続き

1987年7月

各大学で授業時間の一部を使って（概ね30分前後）実施

授業課目は教職関連科目の場合が多かった。

③ 調査対象

調査総数　1315　（図表1A～1F参照）

9大学（国立5大学41.8%、私立4大学58.1%）

文系　829（63.2％）　理系　482（31.7％）
男　897（68.2％）　女　417（31.7％）
現役　775（58.9％）　浪人経験480（36.5％）
長野大学　218（産社および福祉学科）
男子　151（69.3％）　女子　67（30.7％）
2学年　54　3学年　152　4学年　50

〔3〕回答者の特徴

教職関連科目の受講者を対象にした場合が多かったことがまずあげられる。ただ、なりたい職業として「小・中・高教師」をあげたのは小学校の頃（12.8）、中学校の頃（18.6）、高校の頃（17.1）、現在（14.6）であったから、職業志向として極端に教職志望が多いということではないだろう。

父親の学歴は大学・大学院が33.1％、旧制中学、旧制高校、高専、短大をあわせると47.9％になり、「予備校調査」のほぼ5割とかわりない比率になっている。母親の学歴も新制高校卒が42.4％、短大卒を含め大卒が16.0％で、やはり「予備校調査」と同様の比率となっている。親の世代の進学率を考慮するとかなり高学歴であるといえる。（図表2A）

また、父親の職業は「管理的職業」（課長以上の役職）が29.8％で「予備校調査」（27.3）と大差ない比率となっている。専門的技術職も同様であるから（16.6）、「予備校調査」の父親の高学歴と比較的高く安定した職業層は今回の調査にも共通しているといえるだろう。（図表2B）

〔4〕得意教科・不得意教科と文系・理系の違い

文系・理系の得意教科・不得意教科の差は今回の調査でも現われている。たとえば、国語と算数の得意・不得意によって文理を比較してみると、文科系学部では、小学校の時から算数を不得意とするものが多く、理科系学部では国語を不得意とするものが多くなっている。（図表3A）

高校で国語・算数が得意と答えた者について、小学校時代の社会・理科の得意不得意の差をみることによって、文系・理系の早期の分化を改めて確認しておきたい。国語と数学が得意を答えた者、国語のみ、数学のみ、どちらも得意と答えなかった者の4群に分けて国語のみ、数学のみ得意と答えた者に注目して検討する。

国語が得意の者は、社会が得意は47.6％、理科が得意は26.0％である。数学が得意の者は、社会が得意は24.6％、理科が得意は42.5％である。ここでも国・社（→文系）、数・理（→理系）の早期の分化をうかがうことができるであろう。（図表3B）

また、小学校時代の教科の得意・不得意は高校時代にまで継続する傾向も顕著である。小学校時代国語が不得意だった者の6割、数学の場合は7割は高校時代も国語あるいは数学が不得意と答えている。逆に、高校時代国語が得意なものは小学校時代も得意と答えるものが73.6％、数学の場合は77.2％が小学校時代も得意と回答している。

次に、長野大学生の得意教科の傾向をいくつかあげる。

中学時代「英語」を得意教科とする者は26.6％で、9大学中最も低い。地方の福祉系大学であるT大学は35.1％で、全調査者では、39.7％である。高校になると15.6％になり、やはり低率である。「高校生調査」では、中学校、高校の数学・英語の成績による進路の分化が指摘されてきた。長野大学生は「数学」はそれほど顕著に低率ではないが、この「英語」については偏差値による選抜制度の影響をうかがうことが出来る。逆に「体育・保健」、「芸術」を得意教科にあげる者の比率は小学校から他大学よりも高い。高校時代では「体育・保健」が36.7％、「芸術」が27.1％で9大学中最高の比率になっている。

〔5〕高校生活の様子と予備校生活の様子

高校生活の全体の充実度は「予備校調査」では、「とても充実した」が16.5％、「わりに充実した」が44.2％だったのに対して、今回の調査では、「とても」が23.1％、「わりに」が47.5％で充実したとする比率が増加している。（図表4A）

高校生活の基本的領域についての打ち込み度の程度や傾向は「授業」や「受験勉強」など打ち込み度の強くなった項目もあるが、「予備校調査」とそれほど大きな差はない。

予備校生活について高校生活と比較してその充

実感をいくつかの項目でたずねている。「予備校調査」と同様に、「授業の内容」、「先生の姿勢や教え方」、「模擬試験」、「進路に関する情報」の項目では、予備校生活のほうが「とても充実している」または「わりに充実している」と答えたものの比率が高い。あわせると8割以上になり、「予備校調査」以上の比率となっている。（図表4B）

一方、「友達とのつきあい」は35.6％になっている。「個別指導や相談」が52.1％、「学校全体の雰囲気」が52.3％である。この3項目が低率なのも「予備校調査」と同様である。（図表4B）

また、全体としての充実度は「とても」と「わりに」充実した者を加えると67.2％になっている（図表4C）。ちなみに、高校生活の全体として充実度の同様の比率は70.6％である。

高校生活の充実度の場合とはことなり、授業や進路に関する指導がその充実感の背景にあると考えられるが、予備校の進路指導については次のように評価している。「ていねいだった」「自分の意志が尊重された」点では、「とてもそう思う」と「わりにそう思う」を加えると54.4％と68.2％である。しかし、「将来の生き方や目標をよく考えにいれてもらった」という点では38.5％に低落する。そして、「偏差値や模試偏重だった」ことには最も肯定率が高く、69.8％になっている。(図表4D）

以上のような結果から、予備校の生活には授業を中心に高い充実感を持っていること、その進路指導については、自分の意志は尊重してくれてはいるが、将来の生き方を考えに入れるところではあまり充分とはいえず、結局は偏差値偏重であるという評価がまず平均的であると考えられる。

「予備校調査」の概括では、予備校が進路選択に大きな役割を果たしているだけに、人生選択に結びつき得る進路指導の必要性が指摘されていたが、今回の調査では、ある意味でそれを裏付けるものになっている。

長野大学生の高校生活の様子の傾向について述べる。

出身高校の進学率は「4割～9割」が48.2％と多くなっている。（2、3年生）

同じ地方の福祉系私立大学であるT大学も53.0％と高率である。全体の場合は27.1％となっている。また、職業高校出身者も1割程度いることも大きな特徴である。

さらに、地方高校がほとんどであり、これら出身高校の傾向は、大学の雰囲気をつくる一つの大きな要因になっていると思われる。

他大学と比較して「打ち込み度」の強い項目は「生徒会活動」である。「かなり」「わりと打ち込んだ」を加えると、23.4％で、全体では13.5％であるから、やや高率となっている。福祉学科があることに加えて、こうした高校での生徒会活動の体験が、学内でのボランティア活動の活発さの一つの背景になっているのかもしれない。

〔6〕大学進学決定要因、大学・学部選択の考慮要因

(A) 大学進学決定要因について

大学進学を決めたときの考慮要因や、大学・学部を選択したときの考慮要因の全体的な傾向は「予備校調査」と同様の特徴を示している。大学進学決定要因を因子分析によって類型化すると次のような結果が得られた。（図表5A－A、5A－B）

第1因子　「専門知識を身につける」「自分の将来の人生計画・目標」「自分の興味・関心」「生涯打ち込めるものを見つけるため」「自分の性格や向き不向き」「教養を身につけるため」の6項目　「将来と自分の興味・関心」に関わる項目群である。

第2因子　「家庭の勧め」「先生の勧め」の2項目　「周囲の意見」に関わる項目である。

第3因子　「安定した地位を得る」「まわりの皆が行くから」「自由な時間が得られる」の3項目　「安定と自由な時間」志向に関わる項目群である。

第1因子は大学進学決定に際して多くの学生が強く考慮した項目群で構成されている。将来の人生への目的意識と自分の興味、関心が結びつくかたちになっていることを示している。この因子は、「予備校調査」では、国立大学志望者が私立大学志望者よりも肯定率が高く、理科系が文科系よりも肯定率が高いという結果になっていた。

第2因子は比較的考慮されることのない項目群になっている。

第3因子は「予備校調査」では私立文科系の志望者の肯定率が高くなっていたものである。安定した地位を得るといった学歴＝安定志向と、自由な時間＝学生生活のエンジョイ志向が結びついていることを示している。

残った項目である、「自分の成績」や「家庭の経験力」はどの因子にも含まれず、大学進学決定要因として、独自の性格を持っていると考えられる。

3因子について、それぞれの因子得点を算出し、学校別に一元配置の分散分析と多重比較によって平均値の差を検定し、学校ごとの特徴について検討して、長野大学生の進路選択意識の傾向をみていきたい。

T大と共通するのであるが、「将来と自分の興味・関心」を考えて、また、家庭や、先生と相談して決定している傾向が強い点が目だっている。（図表5A－C～5A－E）

これらの背景にはいくつかの条件が複合して存在しているのではないかと考えられる。そこで、長野大生の家庭の状況などの特徴を改めて、確認しておきたい。

長野大生には家庭の状況など、地方の福祉系の大学であるT大と共通するいくつかの特徴がある。全体としては、父親の高学歴の傾向があったのに対して、大学・大学院卒は、20.8％で、10％以上低くなっている。（ちなみに、同じ地方大学のT大も18.6％と低率である。）また、働いている母親が多く、「無職」「家事従事」は、32.7％である（T大33.1％　全体49.0％）。自宅通学は少なく14.3％である（T大は12.4％　全体では45.7％）。出身地は、過半数は長野県およびその近県であるが、それ以外は全国に広がっているが、県庁所在地ではない地方都市の出身者が多いようである。また、出身高校の進学率は「4割～9割」が52.0％と高率である（T大55.0％　全体27.9％）。現役入学者の比率も74.4％と高い（T大89.0％　全体58.9％）。

大学進学の決定は、特定の大学あるいは学部をある程度、念頭において行われるのが自然であろうから、それを前提に議論することにするが、まず、進学先が福祉系という専門の性格があるだろう。福祉志望という進学動機は、今のところ、希少であり、自発性や将来の人生設計が問題にされるような現状がある。そのことも反映して、「将来や自分の興味・関心」を考える程度も、周囲の勧めや意見を聞く程度も、強くなると思われる。それに加えて、先にみたように、家庭的にも、出身高校の状況も、進学が当然という雰囲気や条件ではない者が比較的多いこと、さらに、地方出身者であるから、出身地を離れて、進学するわけであり、当然、周囲からの働きかけも強くなるであろう。そして、本人にも、それなりの葛藤があり、決断が必要とされたであろう。「学部・大学」の選択においても「周囲の意見」を聞く傾向が強かったのも、こうした進学決定にいたるまでの種々の条件をクリアしなければならないという事情が働いていたのではないかと考えられる。

また、「安定した地位と自由な時間」の因子が高くなっているのは、福祉学科に加えて、学科の性格の曖昧な社会学系の学科の学生もいること、また、ともかく、大学生活をおくりたいという学生も一定数入学してきていることを反映しているのであろうか。

(B)　大学・学部選択要因について

「大学・学部選択要因」に関しても、ほぼ予備校生調査と同様の因子構造となった。（図表5B－A、5B－B）

第1因子　「先生の意見」「家庭の意見」「友達の進路」「親の職業」

第2因子　「大学の施設や設備」「大学のカラー」「大学所在地の魅力」

第3因子　「教科の得意・不得意」「自分の成績と難易ランク」「進学先の試験科目」

第4因子　「自分の興味・関心」「自分の性格や向き・不向き」「大学の研究・教育内容」

第1因子は、周囲の意見や環境の影響に関する項目群であり、全般的に肯定率の低い項目群でもある。

第2因子は「大学の施設や設備」「大学のカラー」「大学所在地の魅力」など大学の外面的魅力で大学・学部を選ぶ項目群と言える。

第3因子は、「教科の得意・不得意」や「成績

と難易ランク」など成績を選択要因として重視する項目群と言える。

第4因子は、「自分の興味・関心」や「自分の性格や向き・不向き」「大学の研究・教育内容」など、自分の内面の評価と大学の研究・教育条件とを結びつけて進路を決定しようとする項目群である。

第5因子は、「就職状況」と「進学先の評判」など、大学の一般的評価に関わる項目群となっている。

「家庭の経済力」「自宅通学の可能性」は肯定率が低い項目であり、どの因子にも含まれない。また、「資格の取得」に関して、前回は第4因子「自分の内面評価と大学の研究・教育内容」に含まれたが、今回はそれほど高い負荷は示さず、第1、第5因子にもやや高い負荷を示すなど、非常に多義的な項目となっている。今回の大学生たちがもつ進路選択意識において「資格取得」のもつ意味の多義性がうかがわれる。

長野大生の場合の「大学・学部選択」の傾向について次に検討する。既に述べたところとだが、「周囲の意見」を聞いて選択している傾向が強い。（図表5B－C）

この背景について、さらにつけ加えれば、長野大生もT大生も当初の希望は「他大学・他学部」であったという者の比率が高いということがある。長野大生は希望通りでないと答えたものの67.3％、T大生は68.3％となっている。他大学は13％～49％であるから、かなり高率ということが出来る。当初の希望とは相当異なる大学であったことも、周囲と相談し、その意見を考慮する傾向を強めさせることになったのではなかろうか。

また、大学の施設や設備、所在地の魅力など「大学の外的条件」を考慮する傾向も示されている。（図表5B－D）

これは大学の魅力として周辺の恵まれた自然環境をあげる学生が多数いるのと対応している。さらに、「進学先の評判や就職状況」を考慮する傾向は、福祉系の学科の影響とともに、開学以来、歴史が浅く、就職状況に不安が感じられることや、地方大学の場合の就職への疑問などが影響しているのであろう。そして、これらは学生の親たちの不安でもある。

次に、今回の調査で新たにもうけた設問「大学に入ってからもっと考慮すべきだった項目」について全体の傾向を検討してみたい。

進学決定要因で考慮すべきだった項目で全体の10％を越してはいるものは「興味・関心」「性格の向き・不向き」「自由な時間が得られる」「自分の将来の人生計画・目標」である。「興味・関心」は進学決定の要因として9割以上の者が答えたのであるが、これら自発的、目的意識的な要因がさらに考慮すべき項目として選択されるのは、大学への適応の基本的要因であり、大学進学の原動力ともいうべきものなのであろう。（図表5C）

次に、大学・学部選択要因で考慮すべきだった項目として10％を越しているものは「就職状況」「大学の研究教育内容」「大学の施設や設備」「大学のカラー」の4項目である。これらは大学・学部選択に際しては30～50％のものが考慮したとする項目である。（図表5D）

そして、大学で学習し、生活する者にとっては基本的条件といってよいが、実際、大学生活を過ごしてみて、改めて、これらの条件をもっと考慮すればよかったとするものが比較的、高率で出ていることは注目に値する。こうした大学の教育内容・条件についての関心は、現在振り返ってみて、大学・学部選択に際してあればよかった情報の設問に対して、群を抜いて「授業内容やカリキュラム」（全体の60.3％）があげられているところにも示されている。さらに、これについで「卒業生の就職状況や進路」（34.5）、「大学の施設・設備」（32.3）、「学部・学科ごとの違い」（32.3）があげられており、「入学試験の傾向」や「大学の偏差値」は数％にすぎないところにもあらわれている。（図表5E）

大学生活を体験してみると、大学選択に必要なのは大学生活の内容に関わる情報であることを当然、認識せざるを得ないであろう。しかし、そうした情報は、十分提供されてはいないし、また、偏差値の枠づけのもとでは、より高い偏差値の大学に合格することが優先され、仮に情報があったとしても、その情報が生かされにくい状況になっているともいえるだろう。

長野大学生の場合大学進学決定要因として「もっと考慮すべきだったこと」で、他大学と比べ高

率になっている項目は、「資格をとること」で16.1％である（ただし２、３年生）。これはＴ大も高率である（12.4％）。学部・大学選択要因としても同様に、「資格の取得」が高率になっている。全体では8.4％なので、きわだって高率というのではないが、長野大学生の資格志向の強さを示しているといってよいだろう。

〔7〕大学生活の充実度を規定するいくつかの問題

全体としての充実度は「わりに」と「とても充実している」者を加えると58.2％になる。高校生活は70.6％であったから充実感を持つものは12％程度減少していることになる。４割のものは充実感を持っていないのであるから、これはやや問題ではなかろうか。（図表６Ａ）

大学生活の充実度を規定しているのは当然、現在の大学での各領域での打ち込み度であろうが、背景にはいくつかの要因があると考えられる。どの様な要因があるか包括的な検討は今後に待つとして、さしあたり、いくつかの問題を指摘しておきたい。

まず第一にいわゆる「不本意入学」の問題がある。成績＝偏差値による選抜が支配的な現状においては、偏差値の枠づけに縛られながら進学先を選択するのであるが、それでも、希望通りに進学できるのは約４割に過ぎない。（図表６Ｂ）

結局、相当数は「不本意入学」になるのだが、「進学先が希望通りであったかどうか」によって大学生活の充実度が影響されることが考えられる。希望通りの大学に進学した者はその67.6％が「充実している」と答えているのに対し、希望通りでなかった者の場合は53.0％であり、さらに、当初の希望は他大学の他学部であったという、ある意味で希望が最も実現されなかった場合、「充実している」と答えるのは47.6％と半数を下回ることになる。（表６Ｃ）

希望する進学先でなかった場合、充実感を持ちにくい状況は確認できるが、次のようなことも考える必要がないだろうか。現在のような偏差値が優越する選抜は、大学の序列化と高い序列の大学への入学願望を前提にして成り立っている。したがって、多くの者が序列に乗り損ねても不満を感じなくなってしまうようであれば、その前提条件が崩れてしまうことになる。そういう意味では「不本意入学者」の存在と彼らの不満は「受験体制」を存続させる一つの原動力なのであろう。従って、客観的な大きな制約があるとしても、彼らの不満を、大学生活の中で新しい意欲に転換することができれば、「受験体制」をつき崩す一つの重要な力になるのだと思われる。

第二に、進学動機の自発性と目的意識性の問題がある。大学進学決定要因のうち「自分の興味・関心」「資格をとること」「専門知識を身につける」「教養を身につける」「自分の将来の人生計画」「生涯打ち込めるものを身につける」といった自発的で目的意識的な項目群について考慮して、進学を決定した者のほうが、進学先が「希望通り」か否かを問わず、充実感が高くなっている。一方、充実度の低いもののほうが、決定するにあたってもっと考慮すべきだったこととして「興味・関心」などの項目をあげているのである。（図表７）

「予備校調査」では高校生活の充実度が高い者のほうが、自発的で目的意識的な項目を考慮して判断している傾向が指摘されているが、今回の調査では改めて、大学進学における自発性と目的意識性の重要さが浮かび上がってきている。

そこで、大学進学決定要因のうち、自発性と目的意識性に対応する項目として「生涯打ち込めるものを見つけるため」を選び、それに対照的な項目として「安定した地位を得る（就職に有利、学歴がないと困る）」を選び、さらに、大学進学のための準備である高校生活における「受験勉強」の打ち込み度とを組み合わせることによって類型をつくり、進学動機と受験勉強への関わりが大学生活の充実度にどの様に反映しているか、高校生活の充実度と比較しながら検討したい。

検討の対象は大学生活の一定の体験を前提に回答できる２、３年生とする。次のような８つの群が設定される。

① 「安定」、「生涯」を「とても」あるいは「わりに考え」て、進学を決め（それぞれＡ、Ｓと略記）、受験勉強に「かなり」あるいは「わりと打ち込」んだ（Ｊと略記）者→ＪＡＳ群と略称。（以下同様に略記する）

② 「安定」、「生涯」を考慮したが、「受験勉

強」に打ち込まなかった者→ＡＳ群

③　「生涯」を考慮して、受験勉強に打ち込んだ者→ＪＳ群

④　「生涯」を考慮して、受験勉強に打ち込まないで進学した者→Ｓ群

⑤　「安定」を考慮して受験勉強に打り込んだ者→ＪＡ群

⑥　「安定」を考慮したが「受験勉強」に打ち込まなかった者→Ａ群

⑦　「安定」「生涯」を考慮せず、「受験勉強」に打ち込んだ者→Ｊ群

⑧　「安定」「生涯」を考慮せず、「受験勉強」にも打ち込まなかった者→ＮＯＮ群

高校生活の充実度ではＪＳ群とＪ群の平均値が3.1、3.0と高くなっている。逆にＡ群とＮＯＮ群の平均値は2.7で低い。全体として受験勉強の打ち込み度が強い群のほうが充実度が高くなっている。

一方、大学生活の充実度は、Ｓ群が2.8で高く、ＪＳ群、ＮＯＮ群がついでいる。逆にＪ群は2.4で低く、ＪＡ群、Ａ群がついで低くなっている。全体として「生涯打ち込めるものを見つけるため」を考慮した者のほうが充実度が高くなっている。

各群の充実度の平均値によって順位をつけると、高校と大学で次のように変化している。

上昇：ＡＳ（5→4）、Ｓ（5→1）、Ａ（7→6）、ＮＯＮ（7→2）

下降：ＪＡＳ（3→4）、ＪＳ（1→2）、ＪＡ（4→6）、Ｊ（1→8）

劇的に下降しているのはＪ群（「安定した地位」や「生涯打ち込むもの」は考えないで「受験勉強」に打ち込んだ者）で1位から最下位になっている。平均値としては3.1から2.4への下降であるから、わりに充実から、あまり充実していないにやや近いところに変わったことになる。上昇したのはＳ群とＮＯＮ群がめだっているが、平均値は変化していない。（図表8）

しかし、専門科目の適応に関する項目では、ＪＡ群が多くの項目で最も肯定率が低くなっており、Ｊ群も全体として肯定率が低い。これに対し、Ｓ群は逆に肯定率が高くなっている。「選び直せるなら、他の課程に変わりたい」についてはＪＡ群（36.7）、Ｊ群(37.3)が高率であり、Ｓ群が13.3%で最も低率になっている。（図表9）

同じように、専門の満足度の平均値もＪＡ、Ｊ群は最低（2.6）で、Ｓ群が最も高くなっている（3.0）。（図表10）

また、大学卒業後の進路はＪ群、ＪＡ群は一般企業への志向が強く、63.9%、42.9%の者が希望している。そして、「専門職」を希望するものの比率は、16.9%、29.6%と低くなっている。Ｓ群、ＳＡ群は「大学で学んだことを生かせる専門職への志向が強く56.2%、50.3%の者が希望している。一般企業は18.1%、17.4%と低率である。（図表11）

Ｊ群やＪＡ群は、はっきりした目的意識を待たないで「受験勉強」に打ち込んだ群と言えるであろうが、そのことは、専門科目への低い適応につながり、その結果として、卒業後の進路としても「大学で学んだことを生かす」ような職業のよりも一般企業を選択して行く傾向になってきていると解釈できよう。

以上のことから、①目的意識をはっきり持たないままで、進学を決め、受験勉強にうちこんでいくような場合、高校時代には充実度が高くなることがあること、②しかし、「人生や自分の興味・関心」を考慮しないで、あるいは「安定した地位を得る」というような「現実主義」的姿勢で「受験勉強に打ち込ん」で大学に入ると、専門科目の学習などの面で、不適応になり、充実感をあまり持てないまま、大学生活をおくる可能性があること、③そして、大学卒業後の進路・職業選択においても、「大学で学んだことを生かせる専門職」への志向はほとんど育たず、サラリーマンや公務員一般職などの一般企業を志向することになると要約することが出来る。

しかし、大学生に、高校時代を振り返らせて回答させているのだから、大学生活において、専門科目の学習などの面で、不適応になり、専門性を生かした進路選択への志向性を持ちにくい学生の中に一部、高校時代、あまり目的意識を持たないで受験勉強に打ち込んできて、その時は、それなりに、一定の充実感を持っていたと「思っている」者がいることを示していると説明した方が適切ではないかと考えることもできる。それは、過去の高校時代の進学動機と受験勉強への姿勢をあまり

実態化して考えることは危険だからである。

大学での専門への不適応という現在の状態が、過去の自分の進学動機や受験準備、高校生活についての評価に偏りを与えるのは当然であろう。自分の受験勉強は、結局、大学の専門につながらないものであったということから、その目的志向性についての過小な評価と、地方では、現在の充実感が低いだけに、高校時代は、充実していたと過大に思い返す傾向への偏りである。しかし、こうした偏りの可能性を考慮した上で、偏りの可能性自体が、高校時代の受験準備と進学動機の結びつきを問題にしているといってよい。学部選択に際して、あればよかった情報として、群を抜いて「授業内容やカリキュラム」があげられていたこと、そして、入学試験の傾向や大学の偏差値といった項目はきわめて低率であったことは、既に指摘した通りであり、今日の偏差値による選抜体制のもとでは、大学教育の内容に関わる情報が提供されたとしてもどれだけ有効か疑問である点についてもふれた。これら一連の結果は、専門科目の学習を媒介として、人生と職業の選択、進学動機を問い直そうとする時、その「問い」の完全燃焼を今日の受験体制が抑止していることの集中的な表現と解釈することもできる。

しかし、既に述べたように専門科目への適応を含めて、大学生活の充実度を規定している要因の包括的検討は今後の課題であり、そうした要因の構造連関の中に、受験勉強と進学動機の問題を改めて位置づけていくことを心がけて行きたい。

〔8〕大学生活諸領域の打ち込み度の構造と大学生活の充実度の関係

今回の調査では、大学生活における13の活動領域について、打ち込み度をそれぞれ質問した。ここでは、この13項目の反応について、因子分析にかけることによって、大学生の生活の意識と実態を検討する。（図表12A、図表12B－A）

第1因子は、「専門項目の講義や勉強」や「一般教養の授業や勉強」「ゼミナール」など大学の授業を中心とした項目群がまとまっている。

第2因子は、「ボランティア活動」や「大学以外のところでの学習」など学外での学習・活動に打ち込むことを中心とした項目群となっている。「ボランティア」に関しては第3因子にも若干負荷が高くなっている。

第3因子は、「友だちとのつきあい」や「クラブ・サークル活動」など交友関係を中心とした因子といえる。

第4因子は「自分の趣味」「アルバイト」が一緒になっており、趣味と実益をかねた現代のアルバイト像を示すものとして興味深い。「友だちとのつきあい」はこの第4因子にも負荷が高く、「友だちとのつきあい」の多義性、多様性を物語っている。

「自治会活動」は打ち込むと答える者はほとんどなく、他の項目とはまったく関連のない目となっている。以上、項目によっては複数の因子に負荷が高いなど、4つの因子はそれほどきれいな単純構造とはいえない。

さて、大学生活の諸領域の打ち込み度と全体の充実感であるが、「打ち込み度」の4因子の因子得点と「充実度」の評定尺度値との間の相関係数は、次の通りである。

第1因子（「専門科目やゼミなど大学内での学習活動」）：－0.257

第2因子（「ボランティア活動や学外での学習活動」）：－0.089

第3因子（「クラブ・サークル活動や友達とのつきあい」）：－0.313

第4因子（「アルバイトや自分の趣味」）：－0.220

「学外での学習活動」を除いて一応の相関関係が認められる。「学外での学習活動」との関係がみられないのは、大学生活に不満なために学外での学習活動に打ち込むことになるという関係を反映している結果と解釈できよう。

さらに、この4つの打ち込み度を説明変数として重回帰分析をおこなったところ、0.434という高い重回帰係数が得られた。（図表13）

これらのことから、「サークル活動や友達とのつきあいに」に打ち込み、「大学内での学習」に打ち込み、「バイトや自分の趣味」に打ち込むほど大学生活は充実していると感じる傾向はあるといえよう。

長野大生の大学生活諸領域の「打ち込み度」の特徴を次ぎに検討したい。

専門科目やゼミなど「大学の授業」に関わる項

目への打ち込み度が、他大学に比べて強くなっている。これは、やや、解釈に苦しむ結果である。調査をした講義は必修あるいは選択必修科目で、受講者が特に勉強熱心とはいえず、平均的な傾向を逸脱しているとは考えられない。

「大学外での学習やボランティア活動」の打ち込み度も強い。

また、「友達とのつきあい、サークル」への打ち込み度も強くなっている。地方大学で、県内には私立の4年生大学が皆無という状況なので、下宿を中心とするつきあいは濃密であり、また、大学への登校率（受講率とはやや異なる）も高いという状況と対応しているのであろうか。さらに、「自分の趣味、アルバイト」への打ち込み度もやや強くなっており、長野大生の場合、大学生活の各領域での打ち込み度は総じて強いといってよいであろう。（図表12B－B～12B－E）

しかし、大学生活全体の充実度はそれほど高いわけではなく、大学への満足感も高くない。「とても」と「かなり満足」している者を加えると、ほぼ40％にすぎない。全体としては、56％であるから、全体の平均を下回っているわけである。打ち込み度の強さに比して、大学への満足度の低さはかなり目だつ。大学生活の場合、その活動の領域は広くまた、当初の希望との落差や、大学生活に期待するものも多様であるから、打ち込み度がそのまま、大学生活全体の充実感や大学への満足感につながらない場合があることを示している。ただ、長野大学の場合、小規模な地方大学として、大学全体としてのまとまりや求心力をどう考えたらよいであろうか。学生の生活諸領域での「打ち込み体験」が大学への帰属感、満足感に結びついて行く必要はないであろうか、仮に、そうだとすれば、どの様な教育条件と内容が準備されなければならないのか、大いに考えさせられるところである。

〔9〕卒業後の進路選択と人生観

(A) 卒業後の進路選択について

卒業後の進路や職業を考える際の考慮要因についても因子分析を行うと次のような因子が抽出された。（図表14A、14B－A）

第1因子　「生活の安定性」「企業の将来性や安定性」「収入」「昇進の可能性」「勤務時間」「企業のイメージカラー」「仕事の将来性」「長く勤められること」「職業の社会的意義や評価」の9項目

第2因子　「自分の興味・関心」「自分の性格や向き・不向き」「仕事の内容」「自分の能力」「やりたい仕事ができる」

第3因子　「大学の先生の意見」「就職課などの意見」「友達や先輩の意見」「家庭の意見」「親の職業」

第4因子　「自分の大学ランク」「自分の大学のこれまでの就職実績」「自分の成績」

第5因子　「資格を生かす」「専門の知識・技術を生かす」

第1因子は、「生活の安定性」や「企業の将来性」「収入」などの項目に負荷が高く「生活安定志向」の進路決定要因群といえる。

第2因子は、「自分の興味・関心」「仕事の内容」「やりたい仕事ができるか」など「自分の内面評価と仕事内容」を考慮する要因群と言える。

第3因子は、「大学の先生の意見」「就職課などの意見」など周囲の意見・アドバイスを考慮する項目群である。

第4因子は、「自分の大学のランク」「これまでの就職実績」など「大学のランク」を考慮する要因群と言える。

第5因子は、「資格を生かす」「専門の知識・技術をいかす」という項目に負荷が高く、「自分の専門性」を考慮する要因群となっている。

長野大学が他大学と比べ、考慮する傾向の強い因子は、「周囲の意見・アドバイス」である。福祉系の地方大学であるT大が、「周囲の意見・アドバイス」だけでなく、「資格・専門」や、「自分の成績、大学のランク」を考慮する傾向が強くなっているのと対照的である。大学進学に際して資格志向はかなり強かったにも関わらず、職業選択において、あまり強くでなかった理由は納得できないところである。産業社会学科と福祉学科の学生が混在していることが、ここでは影響しているのであろうか。ただ、地方の小規模大学として、教員、就職課を含め、意見・アドバイスを考慮している傾向が強い点には注目すべきであろう。こ

れは、学生が独自に就職情報を得にくいという事情や、小人数の教育の成果などいくつかの要因が影響していると考えられるが、大学生活諸領域での「打ち込み度の強さとも関連して、大学教育の可能性のありどころを暗示していると思われるからである。（図表14B－B～14B－F）

(B) 人生観について

全体の共感度が強い項目は「暮らし向きはまあまあでも、家族みんなが丈夫に暮らすこと」「好きな人と結婚して、楽しい家庭をつくること」「自分の好きなこと（音楽・絵画・スポーツなど）に熱中できる生活をすること」で、選択肢の平均値4.0前後（「わりにあてはまる」）ときわめて肯定率が高くなっている。

逆に低いのは「宗教的な信仰と祈りの生活をすること」で、選択肢の平均値が1.5（「まったくあてはまらない」と「あまりあてはまらない」の中間値）である。

長野大生が他大学に比べ肯定率の高い項目は、「貧しい人や困っている人のために働く生活」「世界の正しくないことをおしのけて、清く正しく生きる」である。

これはT大学も高率である。

社会的正義の実現に対する共感度が強いといってよいであろう。

〔10〕まとめにかえて

最後に、まとめにかえて、感想めいたことを記しておく。

今回の調査結果をみて、まず強調したいのは次の点である。

① 大学生活を体験してみると、当然のことであるが、大学入学前にあればよかった情報として、「授業内容やカリキュラム」をはじめ、教育内容と教育条件に関わる項目があげられている。しかし、「偏差値」による大学のランクづけが優越している現状では、これらの情報が、仮に提供されたとしても、事前に活用されにくいことが予想される。

② 教育内容や条件についての情報の要望の背景には、大学や学部の個性によって、進路選択の意識や大学生活の状況は大変異なっているという、今回の調査の一つの結果が関係していると思われる。一元的な「偏差値」にもとづく選抜システムのもとであっても、各大学の歴史や立地条件、大学や学部の性格に応じて、多様なかたちで、その後の大学生活が行われているのだが、そうした生活が現状では見えにくくなっているということなのであろう。

③ また、高校時代、「生涯打ち込むものを見つける」といった大学進学動機を強く持たないで、「受験勉強」に打ち込んだと答える者のほうが、専門科学への適応度や大学生活の充実度が低くなっていることも注目される。このことは、進学動機を棚上げにした受験勉強の問題性を改めて浮かび上がらせている。

④ これらの結果は、高校生が自分の進学先を決定しようとするとき、大学の教育や生活が多様な個性を持つものとしては見えていない現実を示しているとともに、現在の入試制度は、大学の個性を見えにくくする、一種の壁のような役割を果たしているといえるだろう。青年の進路選択を助けるというよりも、それに逆行するような役割を果たしているのではないかとすら感じさせるものになっている。

⑤ 今回の調査は、入試制度が高校と大学の接続関係をむしろ歪めるものとして機能している現実だけでなく、大学生の生活世界の広がりと大学・学部による違いを示すものになっている点では、大学教育のあり方についても検討の必要性を感じさせるものである。

学生数が急減する時期をにらんで、「生き残り」という経営的な観点から、大学教育についての検討が盛んであり、とりわけ、私立大学にとってそれは避けることのできない問題であろう。ただ、大学が、学生の専門的な教養の形成を通じて、進路選択や人生選択を援助しうる力量を持つこと、すなわち、青年の高等教育機関になることが、大学として「生き残る」ための原動力であることも事実であろう。したがって、あるべき大学生の理念や「管理主義」的発想ではなく、今回の調査が大学・学部による違いを示したように、それぞれの大学の学生の現実に即して、彼らに見えている（あるいは、見えにくくされてしまっている）大学生活と大学が求

める教養の落差を丁寧に埋めていくという立場と、青年が自主的に進路を選択していける能力を獲得していくという方向で、大学生活へのガイダンスや一般教育から専門教育への接続関係、さらに、専門的教養と職業、人生選択の問題などについて、吟味していくことが大変重要なことではないだろうか。

⑥ さらに、そうした、吟味の作業の前提になるのは、大学・学部・学科の特徴だけでなく、一人ひとりの学生の個性を大事にするというところから出発することではないだろうか。

今回の調査によっても、我が、長野大学生の場合、一般的な進学のコースを歩んで来たというより、いくつかのきっかけが重なり合って、進学が決まったケースが相対的に多いと思われる。また、いわゆる、不本意入学の比率も高い。それだけに、入学までになんらかのドラマがあったと推測される。さらに、大学生活の諸領域での打ち込み度と大学生活全体の充実度や大学への満足度の関係も他大学と比べ、単純ではない。そこには、屈折があり、安易な類型的な理解を許さないものが感じられる。しかし、長野大学のような地方の小大学の教育の可能性は案外こんなところにありはしないだろうか。一人ひとりの青年の人生の重みにふさわしい理解に裏付けられた教育体制の模索が可能な大学はどこにでもあるとはとても思えないが、物質的基盤は十分ではないにしても、自然などの環境と人間には、随分恵まれている我が大学は、そうした気長で丁寧な模索の最良の場ではないかと考えられるのである。

（受理 1988. 10. 31 ）

図表１Ａ　サンプル構成　　（　）内％

大　学	男	女	合　計 (%)
Ｓ大学(国)	126	88	215 (16.3)
ＴＹ大(国)	29	7	36 (2.7)
ＴＲ大(公)	27	8	35 (2.7)
ＮＣ大(国)	172	27	199 (15.1)
ＣＢ大(国)	16	50	66 (5.0)
Ｔ大学(私)	57	94	151 (11.5)
長　大(私)	151	67	218 (16.6)
Ｈ大学(私)	135	57	192 (14.6)
Ｒ大学(私)	184	19	203 (15.4)
合　計	897 (68.2)	417 (31.7)	1315

（※性別不明１名（Ｓ大）を含む）

図表１Ｂ　年齢構成

18　歳	122 (9.3)
19　歳	464 (35.3)
20　歳	398 (30.3)
21　歳	220 (16.7)
22歳以上	106 (8.1)
無　答	5 (0.4)
合　計	1,315

図表１Ｃ　学　年

１年	223 (17.0)
２年	716 (54.4)
３年	274 (20.8)
４年	87 (6.6)
無答	9 (0.1)

図表１Ｄ　学　部

文　系		理　系	
文　学　部	124(9.4)	理　学　部	129(9.8)
教育学部	196(14.9)	工　学　部	346(26.3)
法　学　系	22(1.7)	医　学　部	7(0.5)
経　済　系	41(3.1)		
福祉学部	151(11.5)		
社会学部	268(20.4)		
そ　の　他	27(2.1)		
合　計	829(63.0)	合　計	482(36.7)

無答：４

図表１Ｅ　居住形態

自　宅	601 (45.7)
下　宿	623 (47.4)
親戚・知人宅	10 (0.8)
大学の寮	35 (2.7)
その他の寮	24 (1.8)
そ　の　他	8 (0.6)
無　答	14 (1.1)

図表１Ｆ　入学経路

現役入学	775 (58.9)
浪人経験	480 (36.5)
他の学校へ	29 (2.2)
一度仕事について	15 (1.1)
そ　の　他	9 (0.7)
無　答	7 (0.5)

（浪人経験者の内）

予備校に行った	440
行かなかった	44

図表２Ａ　父の学歴・母の学歴

学　　歴	父	母
1. 旧制小・新制中	243(18.5)	243(18.5)
2. 旧制中学校	92(7.0)	144(11.0)
3. 新制高校他	383(29.1)	558(42.4)
4. 旧制高校他	49(3.7)	36(2.7)
5. 新制高専	35(2.7)	68(5.2)
6. 短期大学	19(1.4)	101(7.7)
7. 大学・大学院	435(33.1)	109(8.3)
8. 無　　答	59(4.5)	56(4.3)

図表２Ｂ　父の職業・母の職業

職　　業	父	母
農　　業	46(33.5)	51(3.9)
林　　業	5(0.4)	2(0.2)
漁　　業	6(0.5)	4(0.3)
採鉱・採石	1(0.1)	2(0.2)
販　　売	120(9.1)	96(7.3)
運輸・通信	50(3.8)	5(0.4)
サービス職業	47(3.6)	96(7.3)
保安職業	31(2.4)	1(0.1)
専門・技術的職業	218(16.6)	113(8.6)
技能工・生産工	220(16.7)	86(6.5)
事務従事者	77(5.9)	131(10.0)
管理的職業	392(29.8)	13(1.0)
家事従業者	0(0.0)	560(42.6)
無　　職	15(1.1)	84(6.4)
そ の 他	49(3.7)	50(3.8)
無　　答	38(2.9)	21(1.6)

図表３Ａ　教科の得意・不得意（文系・理系別）

教科名	小学校		中学校		高校	
	得意	不得意	得意	不得意	得意	不得意
国　理系	77(16.0)	187(38.8)	59(12.2)	200(41.5)	49(10.2)	213(44.2)
語　文系	299(36.1)	94(11.3)	251(30.3)	92(11.1)	236(28.5)	104(12.5)
数算　理系	318(66.0)	19(3.9)	347(72.0)	19(3.9)	292(60.6)	41(8.5)
学数　文系	261(31.5)	208(25.1)	245(25.1)	251(27.9)	146(17.6)	322(38.8)

図表３Ｂ　教科の得意・不得意（高校時の国・数の得意・不得意別）

（○：得意　×：不得意）

教科名		小学校		中学校		高校	
		得意	不得意	得意	不得意	得意	不得意
社	国数○	22(35.5)	17(28.3)	26(41.9)	17(27.4)	22(35.5)	23(37.7)
	国　○	141(47.6)	34(11.7)	153(51.7)	28(9.5)	144(48.6)	29(9.8)
	数　○	105(24.6)	116(27.6)	112(26.2)	115(27.1)	76(17.8)	142(33.6)
会	国数×	179(34.4)	61(11.9)	234(44.7)	54(10.4)	191(37.1)	64(12.3)
理	国数○	29(46.8)	6(10.0)	35(56.5)	5(8.1)	30(48.4)	9(14.8)
	国　○	77(26.0)	60(20.6)	80(27.0)	77(26.1)	38(12.8)	114(38.6)
	数　○	181(42.5)	34(8.1)	241(56.3)	30(7.1)	247(57.7)	33(7.8)
科	国数×	160(30.7)	61(11.9)	184(35.2)	72(13.8)	119(23.1)	115(22.1)

図表４Ａ　高校生活は全体として充実していたか

まったく充実しなかった	あまり充実しなかった	わりに充実した	とても充実した
5.6	23.8	47.5	23.1

高校生活への打ち込み度

	かなり打ち込んだ	わりと打ち込んだ	あまり打ち込まなかった	ぜんぜん打ち込まなかった
a 授業	9.8	38.9	40.2	10.9
b 行事	24.1	40.2	27.1	8.5
c 部活動	39.8	23.0	19.5	17.6
d ホームルーム	4.3	23.4	47.9	24.0
e 生徒会活動	5.2	8.3	25.6	60.5
f 受験勉強	10.1	35.7	41.2	12.7
g 友達とのつきあい	41.6	42.9	13.8	1.6

図表４Ｂ　予備校生活の充実度

	まったく充実せず		あまり充実せず	同じくらい	わりに充実する		とても充実する
1. 授業の内容		7.6	9.6		46.0		33.5
2. 先生の姿勢や教え方	3.3		10.3		44.7		40.0
3. 模擬試験など	1.3	3.6	5.6	11.0	47.0		34.0
4. 学校全体の雰囲気	2.5	7.0	23.1		17.5	37.5	14.8
5. 進路に関する情報	1.3	3.4	9.2		37.8	48.3	
6. 個別の指導や相談	5.8		19.1		22.9	30.8	21.3
7. 友達のつきあい	14.5		26.6		23.3	18.8	16.8

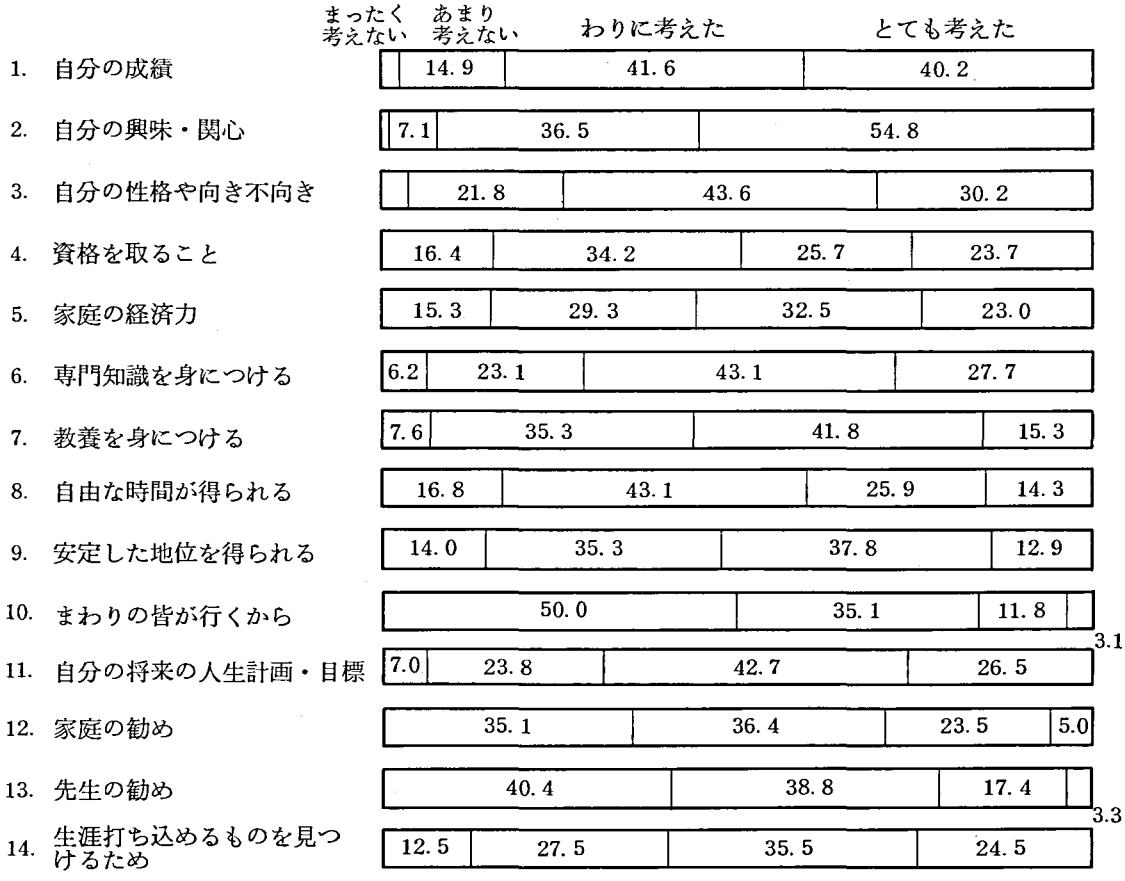
図表４Ｃ　予備校生活全体としての充実度

まったく充実せず	あまり充実せず	わりと充実	とても充実
9.2	23.7	42.9	24.3

図表４Ｄ　予備校の進路指導

	とてもそう思う	わりにそう思う	あまりそう思わない	ぜんぜんそう思わない
1. ていねいだった	16.1	38.3	35.6	10.0
2. 自分の意志が尊重された	25.1	43.1	23.7	8.2
3. 将来の生き方や目標をよく考えに入れてもらった	4.0	9.0	15.0	5.4
4. 偏差値や模試偏重だった	27.4	42.4	26.5	3.6

図表５Ａ－Ａ　大学進学決定考慮要因



図表５Ａ－Ｂ　大学進学決定要因（パリマックス回転後の因子負荷行列）

	第１因子	第２因子	第３因子
6. 専門知識を身に付ける	0.70385	0.02987	－0.00968
11. 自分の将来の人生計画・目標	0.61694	0.11212	0.08454
2. 自分の興味・関心	0.61551	－0.01722	－0.13912
14. 生涯打ち込めるものを見つけるため	0.58981	0.10145	0.06421
3. 自分の性格や向き不向き	0.53926	0.02415	－0.02552
4. 資格を取ること	0.49028	0.13424	0.13314
7. 教養を身に付ける	0.47087	0.03505	0.22157
12. 家庭の勧め	0.04707	0.80876	0.19213
13. 先生の勧め	0.06641	0.68565	0.14223
9. 安定した地位を得る	0.15654	0.15481	0.54584
10. まわりの皆が行くから	－0.14003	0.19718	0.50128
8. 自由な時間が得られる	0.04599	0.04211	0.46418
1. 自分の成績	0.14963	0.19489	0.16351
5. 家庭の経済力	0.25009	0.19767	0.05080

図表５Ａ－Ｃ　因子得点の大学別検定結果（第１因子「自　の将来設計を含んだ自己評価

大　　学	平　均	ＳＤ	N
Ｓ　　文	0.0402	0.8164	109
Ｓ大・理	－0.2995	0.7698	77
Ｔ　　大	0.2007	0.8524	143
長　　大	0.2405	0.8600	162
Ｈ大・一部	－0.2335	0.9018	62
Ｈ大・二部	0.0627	0.9018	125
Ｒ　　大	－0.1207	0.8441	187

F＝6.496***

多重比較結果
長大、Ｔ大＞Ｓ大（理）
Ｈ大（一部）
Ｒ大
Ｈ大（二部）＞Ｓ大（理）
Ｈ大（一部）

図表５Ａ－Ｄ　因子得点の大学別検定結果（第２因子「他者の勧め」）

大　　学	平　均	ＳＤ	D
Ｓ大・文	0.0812	0.8226	106
Ｓ大・理	－0.1386	0.8459	77
Ｔ　　大	0.1443	0.8370	143
長　　大	0.1552	0.8167	162
Ｈ大・一部	－0.1901	0.8034	62
Ｈ大・二部	－0.1189	0.9155	125
Ｒ　　大	－0.1873	0.8113	187

F＝4.595***

多重比較結果
長大、Ｔ大＞Ｈ大（一部）
Ｒ大
Ｓ大（理）
Ｈ大（二部）
Ｓ大（文）＞Ｈ大（一部）
Ｒ大

図表５Ａ－Ｅ　因子得点の大学別検定結果（第３因子「安定・エンジョイ志向」）

大　　学	平　均	ＳＤ	N
Ｓ大・文	0.0688	0.7231	109
Ｓ大・理	－0.2061	0.6276	77
Ｔ　　大	0.0476	0.7485	143
長　　大	0.0992	0.7002	162
Ｈ大・一部	0.0543	0.5108	62
Ｈ大・二部	0.2184	0.8305	125
Ｒ　　大	－0.0623	0.6618	187

F＝3.770***

多重比較結果
Ｈ大（二部）＞Ｓ大（理）
Ｒ大
Ｔ大
長大＞Ｓ大（理）、Ｒ大
Ｓ大（文）、Ｈ大（一部）＞Ｓ大（理）

図表５Ｂ－Ａ　大学・学部決定考慮要因

	まったく考えない	あまり考えない	わりに考えた	とても考えた	
1. 自分の成績と難易ランク	3.4	12.4	43.5	40.6	
2. 教科・科目の得意・不得意	1.8	11.6	47.3	39.3	
3. 自分の興味・関心	0.9	7.9	40.6	50.6	
4. 自分の性格や向き不向き	3.5	20.5	46.8	29.2	
5. 親の職業		62.8	28.5	7.0	1.7
6. 家庭の経済力		17.0	29.6	33.7	19.7
7. 進学先の評判		16.3	37.3	38.6	7.8
8. 進学先の試験科目	6.5	15.7	43.4	34.4	
9. 資格の取得		15.3	36.1	28.2	20.4
10. 友達の進路		51.0	40.2	7.9	0.9
11. 家庭の意見		24.6	41.6	28.4	5.3
12. 先生の意見		32.6	40.0	24.6	2.8
13. 友達の意見		32.5	49.1	17.6	0.8
14. 就職状況		17.2	33.8	37.9	11.1
15. 大学の研究・教育内		11.7	38.6	37.0	12.7
16. 自宅通学の可能性		40.6	20.6	20.6	18.1
17. 大学所在地の魅力		29.8	32.7	27.0	10.5
18. 大学の施設や設備		24.2	41.3	26.8	7.6
19. 大学のカラー		26.1	43.2	23.6	7.0

図表５Ｂ－Ｂ　大学・学部選択要因（パリマックス回転後の因子負荷行列）

	第１要因	第２要因	第３要因	第４要因	第５要因
12. 先生の意見	0.68289	0.11168	0.11207	0.01668	0.06912
11. 家庭の意見	0.67958	0.05836	0.11415	0.03681	0.05658
13. 友達の意見	0.64141	0.20826	0.09414	0.07579	0.07545
10. 友達の進路	0.49594	0.19881	0.08065	−0.11492	0.08969
5. 親の職業	0.38918	0.09523	−0.02665	−0.02074	0.09647
18. 大学の施設や設備	0.08147	0.79900	−0.03176	0.16942	0.17868
19. 大学のカラー	0.12290	0.66878	0.02494	0.08533	0.14399
17. 大学所在地の魅力	0.14846	0.53471	0.06307	0.02296	0.01464
2. 教科・科目の得意・不得意	0.01414	0.08235	0.76060	0.17657	0.04412
1. 自分の成績と難易ランク	0.13527	0.04089	0.64652	0.03226	0.09079
8. 進学先の試験科目	0.11002	0.06795	0.57803	0.07585	0.12549
3. 自分の興味・関心	−0.06148	0.12043	0.13478	0.78486	0.03273
4. 自分の性格や向き不向き	0.03975	0.09192	0.16874	0.64016	0.05422
15. 大学の研究・教育内容	0.03287	0.32509	−0.03440	0.43194	0.22633
14. 就職状況	0.22885	0.18861	0.18858	0.08562	0.72019
7. 進学先の評判	0.22824	0.31718	0.24864	0.04036	0.40301
9. 資格の取得	0.31447	−0.04370	0.11600	0.26452	−0.27092
6. 家庭の経済力	0.23163	−0.01752	0.19433	0.13722	0.02568
16. 自宅通学の可能性	0.08967	0.18826	0.09630	0.04974	−0.02303

図表５Ｂ－Ｃ　因子得点の大学別検定結果（第１因子「周囲の意見や条件」）

大　学	平　均	ＳＤ	N
Ｓ大・文	0.1170	0.7879	108
Ｓ大・理	−0.2994	0.7786	76
Ｔ　大	0.3685	0.8135	144
長　大	0.3616	0.8048	163
Ｈ大・一部	−0.0135	0.8126	60
Ｈ大・二部	−0.0412	0.8515	125
Ｒ　大	−0.2791	0.8426	188

F = 10.3072***

多重比較結果

Ｔ大、長大＞他全部

Ｓ大（文）

Ｈ大（一部）＞Ｓ大（理）、Ｒ大

Ｈ大（二部）

図表５Ｂ－Ｄ　因子得点の大学別検定結果（第２因子「大学のカラー・設備」）

大　学	平　均	ＳＤ	N
Ｓ大・文	−0.3010	0.7772	108
Ｓ大・理	−0.2779	0.8773	76
Ｔ　大	−0.1385	0.7426	144
長　大	0.0634	0.8894	163
Ｈ大・一部	0.0 20	0.8024	60
Ｈ大・二部	0.0813	0.9406	125
Ｒ　大	0.1477	0.8715	188

F = 5.466***

多重比較結果

Ｒ大　　Ｓ大（文）

Ｈ大（二部）＞Ｓ大（理）

長大　　Ｔ大

Ｈ大（一部）＞Ｓ大（文）（理）

図表５Ｂ－Ｅ　因子得点の大学別検定結果
（第３因子「自分の成績」）

大　　学	平　均	ＳＤ	Ｎ
Ｓ大・文	0.2393	0.7603	108
Ｓ大・理	0.2701	0.8058	76
Ｔ　　大	−0.0032	0.7432	144
長　　大	−0.0601	0.8302	163
Ｈ大・一部	−0.0691	0.8998	60
Ｈ大・二部	−0.1924	0.8556	125
Ｒ　　大	0.0354	0.7919	188

Ｆ＝4.417***

多重比較結果

Ｓ大（文・理）＞Ｈ大（二部）
Ｈ大（一部）
長大
Ｔ大
Ｒ大

Ｒ大＞Ｈ大（二部）

図表５Ｂ－Ｆ　因子得点の大学別検定結果
（第４因子「自己の内面評価と大学の研究・教育内容」）

大　　学	平　均	ＳＤ	Ｎ
Ｓ大・文	0.0158	0.8398	108
Ｓ　　理	−0.0899	0.7795	76
Ｔ　　大	0.0462	0.8619	144
長　　大	0.0707	0.8162	163
Ｈ大・一部	−0.2585	0.9297	60
Ｈ大・二部	−0.0786	0.9040	125
Ｒ　　大	−0.1168	0.7864	188

Ｆ＝1.835 有意差なし

分散分析では差が見られなかった。

図表５Ｂ－Ｇ　因子得点の大学別検定結果
（第５因子「大学の評判、就職状況」）

大　　学	平　均	ＳＤ	Ｎ
Ｓ大・文	−0.1818	0.7195	108
Ｓ大・理	−0.4563	0.7410	76
Ｔ　　大	0.3691	0.6970	144
長　　大	0.0578	0.7228	163
Ｈ大・一部	0.1045	0.7538	60
Ｈ大・二部	−0.2312	0.7365	125
Ｒ　　大	0.4190	0.6928	188

Ｆ＝24.310***

多重比較結果

Ｔ大、Ｒ大＞Ｓ大（理）
Ｈ大（二部）
Ｓ大（文）
長大
Ｈ大（一部）

Ｈ大（一部）、Ｎ大＞Ｓ大（理）
Ｈ大（二部）

Ｓ大（文）、Ｈ大（二部）＞Ｓ大（理）

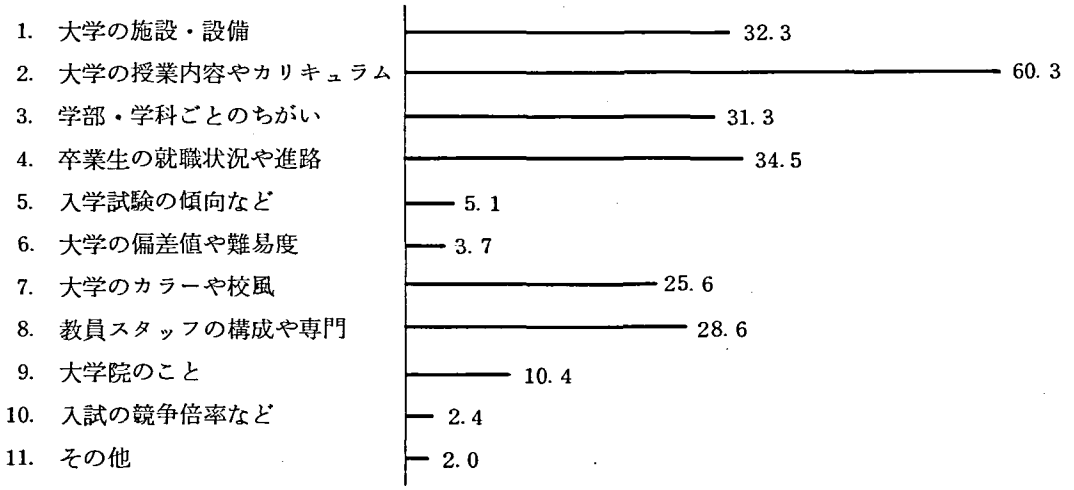
図表５Ｃ　大学進学決定にあたってもっと考慮すべきだったこと、過大に考えすぎていたこと

もっと考慮すべきだったこと		過大に考えすぎていたこと
4.1	1. 自分の成績	5.6
12.5	2. 自分の興味・関心	4.0
11.7	3. 自分の性格や向き不向き	2.7
8.4	4. 資格を取ること	5.7
5.4	5. 家庭の経済力	1.3
9.2	6. 専門知識を身につける	6.3
4.6	7. 教養を身につける	5.4
10.7	8. 自由な時間が得られる	7.1
4.2	9. 安定した地位を得る	4.6
0.5	10. まわりの皆が行くから	2.1
14.8	11. 自分の将来の人生計画・目標	4.5
0.3	12. 家庭の勧め	1.7
0.8	13. 先生の勧め	0.8
7.3	14. 生涯打ち込めるものを見つけるため	3.6

図表５Ｄ　大学・学部選択にあたってもっと考慮すべきだったこと、過大に考えすぎていたこと

もっと考慮すべきだったこと		過大に考えすぎていたこと
3.3	1. 自分の成績と難易ランク	6.5
2.3	2. 教科・科目の得意・不得意	3.1
8.3	3. 自分の興味・関心	3.3
6.7	4. 自分の性格や向き不向き	3.0
0.3	5. 親の職業	0.3
3.4	6. 家庭の経済力	1.4
5.2	7. 進学先の評判	2.5
0.5	8. 進学先の試験科目	2.1
7.8	9. 資格の取得	2.9
0.5	10. 友達の進路	0.6
0.8	11. 家庭の意見	1.4
1.4	12. 先生の意見	1.0
0.3	13. 友達の意見	0.5
12.7	14. 就職状況	3.2
15.5	15. 大学の研究・教育内容	3.2
4.7	16. 自宅通学の可能性	2.2
9.0	17. 大学所在地の魅力	2.9
15.7	18. 大学の施設や設備	2.2
13.6	19. 大学のカラー	2.8

図表５Ｅ　あればよかった情報（３つ以内複数選択）



図表６Ａ　あなたの大学生活は全体として充実していると思いますか。

まったく充実せず	あまり充実せず	わりに充実	とても充実
5.6	36.1	50.3	7.9

図表６Ｂ　現在の学部学科は希望通りか

現在の大学・学部（学科）は、あなたの当初の希望通りですか。

はい（43.9）	いいえ（56.1）

無答0.8

希望通りでない場合、当初の希望はどこでしたか。

他大学 同一学部（40.1）	同一大学 他学部	他大学 他学部（48.2）

（11.7）

図表６Ｃ　「現在の大学・学部（学科）は、あなたの当初の希望通りですか。」大学生活の充実度との関係（２、３年生）

現在の大学・学部は当初の	大学生活「とても」＋「わりに」充実	「あまり」＋「まったく」充実せず
希望通り	67.6	32.4
希望通りでない	53.0	47.0

希望通りでないのうち、当初の希望が他大学・他学部の者

47.6	52.4

図表７　「あなたは大学進学を決めるさい、次のことがらをどの程度考えに入れましたか。大学生活の充実度との関係（２、３年生）

進学先｛希望通り　○／希望通りでない　×｝　　大学生活｛「とても」＋「わりに」充実　○／「あまり」＋「まったく」充実せず　×｝

	進学先	充実度	まったく考えない	あまり考えない	わりに考えた	とても考えた
1. 自分の興味・関心	○	○	0.8	4.2	24.3	60.8
	○	×	0.8	6.3	48.8	44.1
	×	○	1.3	5.6	31.5	61.6
	×	×	0.7	12.6	43.7	43.0
4. 資格を取ること	○	○	15.8	29.1	27.2	27.2
	○	×	12.6	33.9	31.5	21.3
	×	○	8.9	33.8	29.8	27.5
	×	×	15.9	35.2	25.2	23.7
6. 専門知識を身に付ける	○	○	4.5	20.0	40.0	35.5
	○	×	4.7	26.8	48.0	19.7
	×	○	4.3	22.0	45.2	28.5
	×	×	8.5	28.1	40.0	23.3
7. 教養を身に付ける	○	○	7.2	32.1	40.8	20.0
	○	×	7.9	37.0	45.7	8.7
	×	○	5.9	29.8	46.9	17.4
	×	×	7.0	41.5	37.4	14.1
11. 自分の将来の人生計画・目標	○	○	4.5	22.3	41.9	31.3
	○	×	5.5	24.4	52.8	16.5
	×	○	3.0	21.6	43.6	31.8
	×	×	7.4	27.0	43.7	21.9
14. 生涯打ち込めるものを見つけるため	○	○	11.3	24.9	35.5	28.3
	○	×	16.5	31.5	35.4	15.7
	×	○	9.2	23.9	38.0	28.5
	×	×	12.6	30.4	30.4	24.1

図表８　高校生活全体として充実していましたか（８類型別）

受験勉強に「かなり」＋「わりと」打ち込んだ ―――― Ｊ・受験○
安定を「とても」＋「わりに」考えて進学をきめた ―― Ａ・安定○
生涯を「とても」＋「わりに」考えて進学をきめた ―― Ｓ・生涯○

	受験	安定	生涯	まったく充実せず	あまり充実せず	わりに充実	とても充実
ＪＡＳ	○	○	○	4.3	22.8	45.1	27.8
ＡＳ		○	○	6.1	24.4	50.6	18.9
ＪＳ	○		○	2.9	19.0	44.8	33.3
Ｓ			○	7.8	26.9	41.3	24.0
ＪＡ	○	○		3.6	30.1	42.2	24.1
Ａ		○		6.1	30.6	45.9	17.3
Ｊ	○			14.1	64.1		21.9
ＮＯＮ				7.9	27.3	49.6	15.1

大学生活全体として充実していると思いますか。（８類型別）

	受験	安定	生涯					無答
ＪＡＳ	○	○	○	4.9	38.4	51.2	5.5	0.0
ＡＳ		○	○	3.6	35.9	50.9	8.4	1.2
ＪＳ	○		○	4.9	26.5	57.4	9.9	1.2
Ｓ			○	1.9	28.6	56.2	12.4	1.0
ＪＡ	○	○		6.1	40.8	44.9	3.1	5.1
Ａ				7.9	41.0	43.2	6.5	1.4
Ｊ				12.0	39.8	45.8	1.2	1.2
ＮＯＮ				3.1	31.3	60.9	4.7	0.0

図表９　現在学んでいる専門課程について（８類型別）

受験勉強に「かなり」＋「わりと」打ち込んだ ――― Ｊ・受験○
安定を「とても」＋「わりに」考えて進学をきめた ―― Ａ・安定○
生涯を「とても」＋「わりに」考えて進学をきめた ―― Ｓ・生涯○

		受験	安定	生涯	はい	いいえ	わからない	無答
2. 専門課程に興味・関心をそそられる	合計				68.4	16.0	14.9	0.8
	JAS	○	○	○	66.5	20.1	13.4	0.0
	AS		○	○	77.2	11.4	10.2	1.2
	JS	○		○	73.5	13.0	13.6	0.0
	S			○	82.9	5.7	11.4	0.0
	JA	○	○		44.9	28.6	25.5	1.0
	A		○		56.8	21.6	21.6	0.0
	J	○			56.6	25.3	16.9	1.2
	NON				62.5	15.6	21.9	0.0
9. 専門課程をもっと広く学びたい					73.4	10.5	15.5	0.6
	JAS	○	○	○	77.4	9.1	13.4	0.0
	AS		○	○	80.8	6.6	12.0	0.6
	JS	○		○	75.9	8.0	16.0	0.0
	S			○	87.6	3.8	8.6	0.0
	JA	○	○		58.2	18.4	23.5	0.0
	A		○		70.5	9.4	19.4	0.7
	J	○			57.8	24.1	16.9	1.2
	NON				65.6	15.6	18.8	0.0
13. 選び直せるなら他の課程にかわりたい					24.5	54.3	20.6	0.8
	JAS	○	○	○	26.2	51.8	22.0	0.0
	AS		○	○	20.4	58.1	21.0	0.6
	JS	○		○	24.1	60.5	15.4	0.0
	S			○	13.3	69.5	17.1	0.0
	JA	○	○		36.7	38.8	22.4	2.0
	A		○		27.3	48.2	24.5	0.0
	J	○			37.3	44.6	16.9	1.2
	NON				23.4	54.7	21.9	0.0

図表10　専門についての満足度（８類型別）

受験勉強に「かなり」＋「わりと」打ち込んだ ――― Ｊ・受験○
安定を「とても」＋「わりに」考えて進学をきめた。―― Ａ・安定○
生涯を「とても」＋「わりに」考えて進学をきめた ―― Ｓ・生涯○

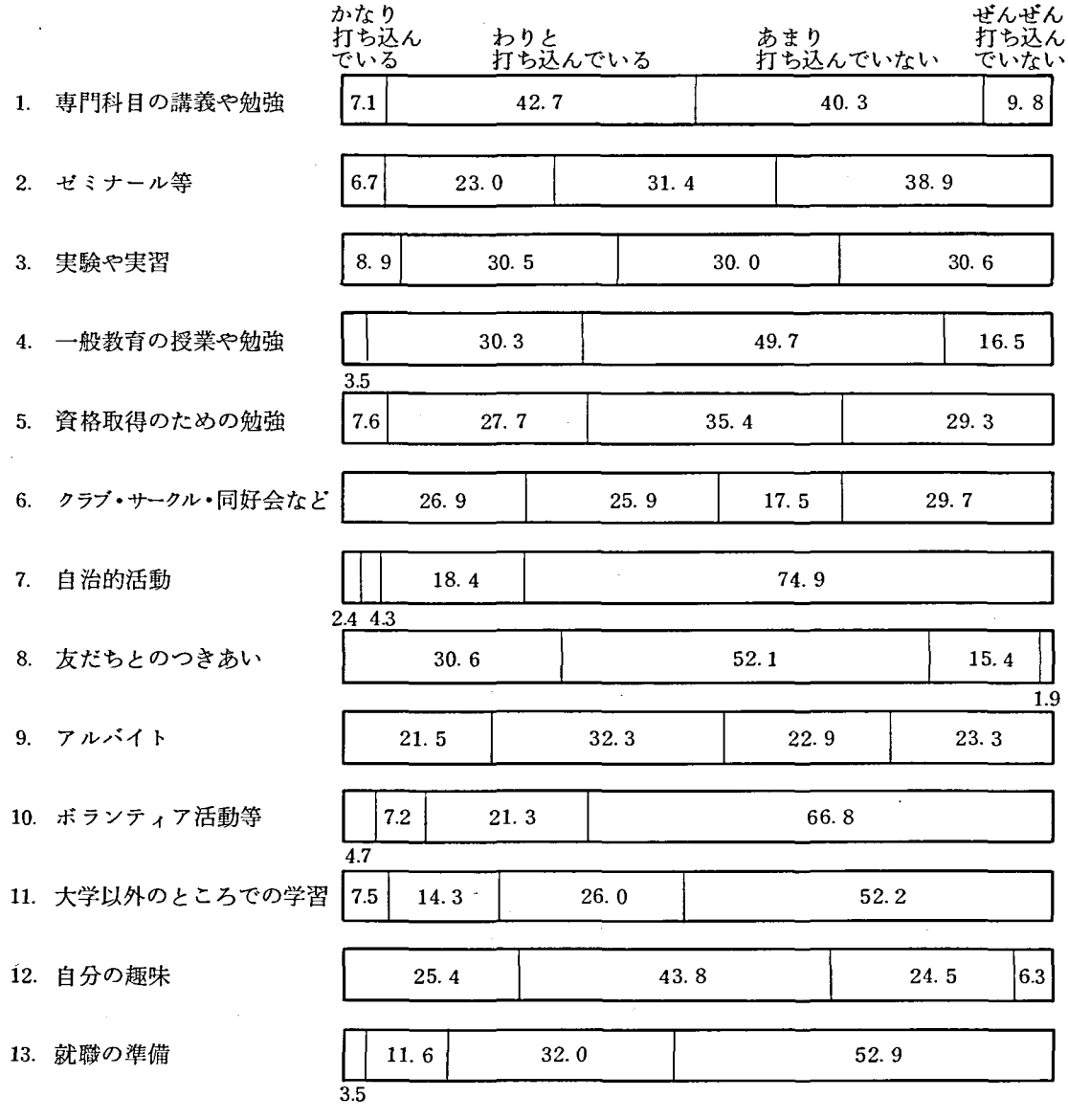
	受験	安定	生涯	まったく不満足	やや不満足	わりと満足	とても満足	無答
合計	○			6.3	23.8	51.3	17.5	1.1
ＪＡＳ	○	○	○	10.4	26.2	47.0	14.0	2.4
ＡＳ		○	○	6.0	22.8	45.5	23.4	2.4
ＪＳ	○		○	4.3	25.3	57.4	13.0	0.0
Ｓ			○	3.8	16.2	56.2	23.8	0.0
ＪＡ	○	○		8.2	33.7	51.0	6.1	1.0
Ａ		○		7.2	23.0	59.0	10.8	0.0
Ｊ	○			8.4	30.1	51.8	7.2	2.4
ＮＯＮ				6.3	26.6	54.7	12.5	0.0

図表11　大学卒業後の進路（８類型別）

受験勉強に「かなり」＋「わりと」打ち込んだ ――― Ｊ・受験○
安定を「とても」＋「わりに」考えて進学をきめた ―― Ａ・安定○
生涯を「とても」＋「わりに」考えて進学をきめた ―― Ｓ・生涯○

	受験	安定	生涯	大学院に進む	一般企業に就職する	大学で学んだことを活かせる	家業を継く	家事手伝い	その他	まだ決めていない	無答
合計				14.8	31.0	33.7				15.4	
ＪＡＳ	○	○	○	8.5	30.5	42.1				12.8	
ＡＳ		○	○	7.2	17.4	50.3				18.6	
ＪＳ	○		○	11.1	34.6	37.7				13.0	
Ｓ			○	9.5	18.1	56.2				13.3	
ＪＡ	○	○		5.1	42.9	29.6				18.4	
Ａ		○		6.5	35.3	30.9				22.3	
Ｊ	○			7.2	63.9	16.9				7.2	
ＮＯＮ				17.2	23.4	39.1				15.6	

図表12A　現在の大学生活の中で、あなたは次のような活動にどのぐらい打ち込んでいますか。



図表12B－A　大学生活の打ち込み度（バリマックス回転後の因子負荷行列）

	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
1.　専門科目の講義や勉強	0. 87708	0. 06626	－ 0. 03281	－ 0. 02758
4.　一般教養の授業や勉強	0. 44167	0. 16427	－ 0. 08304	0. 00238
3.　実験や実習	0. 40826	0. 10138	0. 05465	0. 01816
2.　ゼミナール等	0. 40667	0. 34273	0. 12688	0. 08375
10.　ボランティア活動等	0. 09087	0. 64056	0. 31857	－ 0. 03109
11.　大学以学のところでの学習	0. 16402	0. 54237	－ 0. 08850	0. 27470
13.　就職や準備	0. 25048	0. 49927	－ 0. 08842	0. 21074
5.　資格取得のための勉強	0. 40861	0. 45147	0. 05635	0. 15144
8.　友だちとのつきあい	0. 11474	－ 0. 06142	0. 62750	0. 48657
6.　クラブ・サークル・同好会など	－ 0. 05266	0. 11916	0. 46664	0. 00706
12.　自分の趣味	0. 06457	0. 08945	－ 0. 02567	0. 47588
9.　アルバイト	－ 0. 04726	0. 05511	0. 09365	0. 40258
7.　自治的活動	0. 07971	0. 26146	0. 16908	－ 0. 04800

図表12B－B　因子得点の大学別検定結果（第１因子「大学内での学習活動」）

大　学	平　均	S D	N
S大・文	－ 0. 0668	0. 8521	86
S大・理	0. 0549	0. 8767	59
T大	0. 0187	0. 7952	123
長大	0. 2780	0. 7477	158
H大・一部	－ 0. 2339	0. 8334	56
H大・二部	0. 0149	0. 9169	92
R大	－ 0. 0266	0. 9293	155

F ＝ 3. 467***

多重比較結果

H大（一部）
S大（文）
長大＞R大
H大（二部）
T大

図表12B－C　因子得点の大学別検定結果（第２因子「ボランティアや学外での学習活動」）

大　学	平　均	S D	N
S大・文	0. 0169	0. 6701	86
S大・理	－ 0. 2633	0. 8416	59
T大	0. 3395	0. 7945	123
長大	0. 5793	0. 8287	158
H大・一部	0. 1158	0. 6618	56
H大・二部	0. 0217	0. 7726	92
R大	－ 0. 4200	0. 7665	155

F ＝ 26. 150***

多重比較結果

長大＞R大、S大（理）
T大
H大（一部）
H大（二部）
S大（文）
長大＞S大（文）、H大（二部）
T大
長大＞H大（一部）、T大

図表12B－D　因子得点の大学別検定結果
（第３因子「クラブ・サークル活動や友達とのつきあい」）

大　学	平　均	S D	N
S大・文	0. 1805	0. 6447	86
S大・理	－ 0. 0822	0. 6942	59
T大	0. 1656	0. 8200	123
長大	0. 2005	0. 7903	158
H大・一部	0. 1453	0. 7903	56
H大・二部	－ 0. 2160	0. 7941	92
R大	－ 0. 0184	0. 6127	155

F ＝ 4. 882***

多重比較結果

長大＞H大（二部）
S大（文）
T大
H大（一部）
R大
長大＞S大（理）、R大
S大（文）
T大

図表12B－E　因子得点の大学別検定結果
（第４因子「アルバイトや趣味活動」）

大　学	平　均	S D	N
S大・文	0. 1847	0. 6586	86
S大・理	－ 0. 0004	0. 7336	59
T大	－ 0. 2031	0. 6807	123
長大	0. 1073	0. 7222	158
H大・一部	0. 1449	0. 6013	56
H大・二部	0. 2659	0. 6485	92
R大	－ 0. 0128	0. 7028	155

F ＝ 5. 476***

多重比較結果

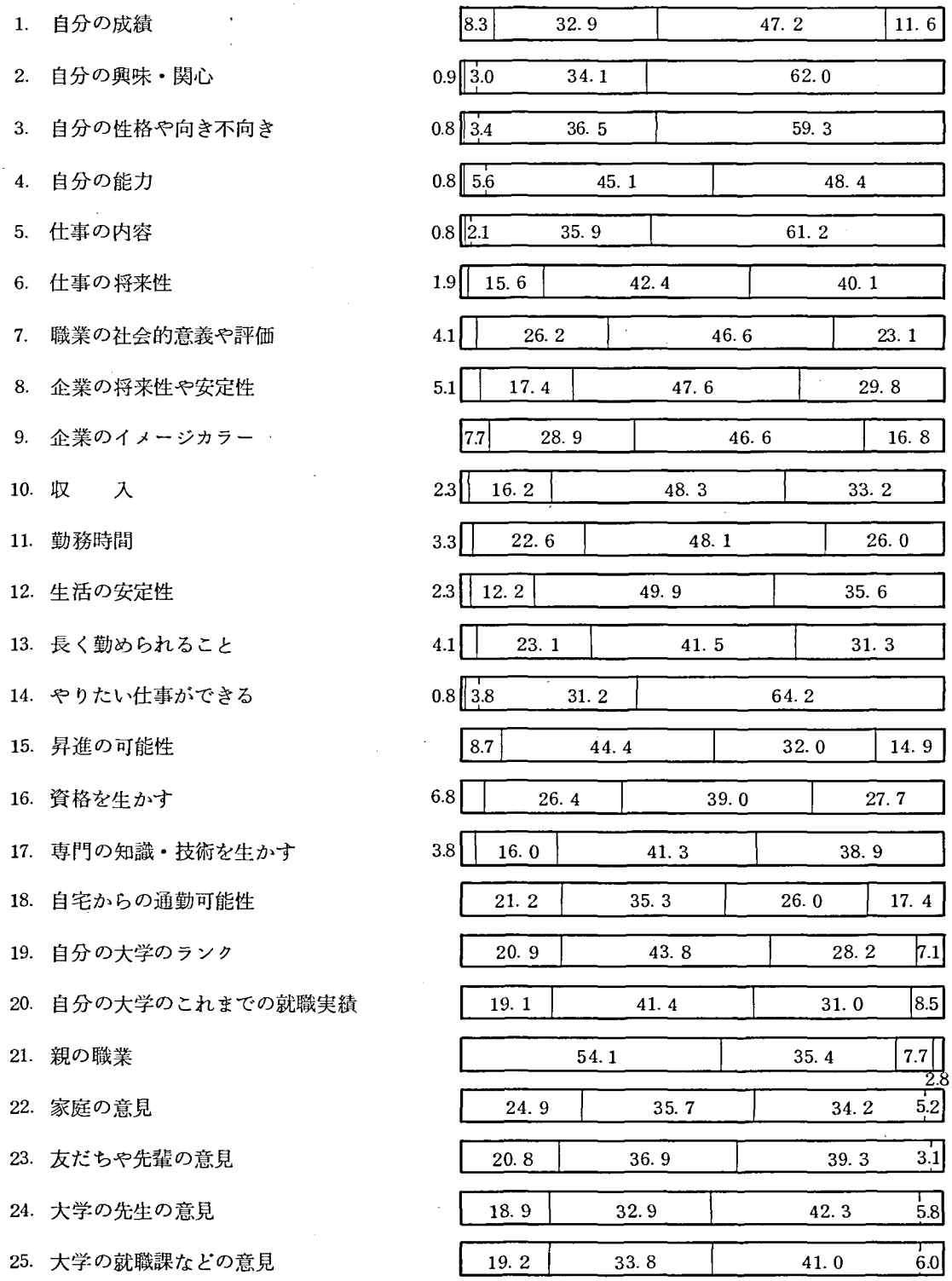
H大（二部）＞T大
S大（文）
H大（一部）
長大
R大
H大（二部）、S大（文）＞R大
H大（二部）＞S大（理）

図表13　「大学生活全体の充実度」を被説明変数とした重回帰分析

変　数	標準回帰係数
第３因子（サークル活動など）	0. 2812***
第１因子（大学内の学習活動）	0. 2553***
第４因子（バイト・趣味活動）	0. 1410***
第２因子（学外の学習活動）	0. 0382

重相関係数　R ＝ 0. 43365***

図表14A　卒業後の進路に関する考慮要因



図表14B－A　卒業後の進路に関する考慮要因（バリマックス回転後の因子負荷行列）

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
12. 生活の安定性	0.75253	0.07401	0.08813	0.09614	0.12202
8. 企業の将来性や安定性	0.71509	0.15839	0.16106	0.13099	−0.01185
10. 収　　入	0.68802	0.04550	0.01921	0.06028	0.00200
15. 昇進の可能性	0.61042	0.05965	0.09586	0.18689	0.10968
11. 勤務時間	0.58353	−0.03320	0.01986	0.08592	0.04013
9. 企業のイメージやカラー	0.55755	0.12477	0.18210	0.16164	−0.03977
6. 仕事の将来性	0.52840	0.35536	0.04640	0.05910	0.08587
13. 長く勤められること	0.48936	0.11291	0.12299	0.11474	0.26369
7. 職業の社会的意義や評価	0.44443	0.18366	0.15792	0.10267	0.12743
2. 自分の興味・関心	−0.01944	0.76253	−0.04823	−0.00860	0.08875
3. 自分の性格や向き不向き	0.11527	0.72096	−0.02462	0.01752	−0.00098
5. 仕事の内容	0.18308	0.66250	−0.03476	−0.02164	0.09632
4. 自分の能力	0.14532	0.62750	0.01993	0.07468	0.06726
14. やりたい仕事ができる	0.10961	0.52987	0.00309	−0.02568	0.28372
24. 大学の先生の意見	0.08054	0.07961	0.83283	0.12443	0.12426
25. 大学の就職課などの意見	0.16821	0.01893	0.74696	0.17683	0.08400
23. 友だちや先輩の意見	0.14068	0.00458	0.73532	0.08415	0.00690
22. 家庭の意見	0.09895	−0.05796	0.61017	0.13730	0.07553
21. 親の職業	0.07632	−0.24612	0.35609	0.15089	0.03063
19. 自分の大学のランク	0.25114	−0.04324	0.19656	0.84890	−0.00097
20. 自分の大学のこれまでの就職実績	0.26635	−0.01337	0.27247	0.73927	0.02990
1. 自分の成績	0.16861	0.11060	0.19280	0.35822	0.08988
16. 資格を生かす	0.22905	0.13456	0.16458	0.08055	0.71585
17. 専門の知識・技術を生かす	0.06181	0.29057	0.08673	0.03212	0.74329
18. 自宅からの通勤可能性	0.27796	−0.08828	0.16822	0.23067	0.17562

図表14B－B　因子得点の大学別検定結果（第１因子「安定志向」）

大　学	平　均	S D	N
S大・文	－0.0652	0.9448	104
S大・理	0.0829	0.8395	74
T大	－0.0790	0.8649	139
長大	0.0517	0.8892	163
H大・一部	0.2444	0.8883	61
H大・二部	－0.0086	0.9492	115
R大	0.1985	0.8270	181

F ＝ 2.229*

多重比較結果

H大（一部）＞T大
　　S大（文）
R大＞T大
　　S大（文）
　　H大（二部）

図表14B－D　因子得点の大学別検定結果（第２因子「自己の内面評価と仕事内容」）

大　学	平　均	S D	N
S大・文	0.1129	0.7994	104
S大・理	0.1057	0.8215	74
T大	0.0496	0.7913	139
長大	－0.1328	0.9117	163
H大・一部	－0.0657	0.7455	61
H大・二部	－0.0580	1.0226	115
R大	－0.0592	0.8637	181

1.404

大学間に有意な差は見られなかった。

図表14B－F　因子得点の大学別検定結果（第３因子「周囲の意見」）

大　学	平　均	S D	N
S大・文	－0.0489	0.9003	104
S大・理	－0.0380	1.0242	74
T大	0.2994	0.7477	139
長大	0.3089	0.8277	163
H大・一部	－0.1873	0.7978	61
H大・二部	－0.1880	0.9747	115
R大	－0.1261	0.9870	181

F ＝ 7.536***

N多重比較結果

長大、T大＞H大（二部）
　　H大（一部）
　　R大
　　S大（文）
　　S大（理）

図表14B－C　因子得点の大学別検定結果（第４因子「大学ランク、就職実績、自分の成績」）

大　学	平　均	S D	N
S大・文	－0.2071	0.7951	104
S大・理	－0.0819	0.9317	74
T大	0.2633	0.9163	139
長大	0.1259	0.7616	163
H大・一部	－0.0664	0.7616	61
H大・二部	－0.0490	1.0037	115
R大	0.2282	0.8345	181

F ＝ 4.749***

多重比較結果

T大、R大＞S大（文）
　　S大（理）
　　H大（一部）
　　H大（二部）
長大＞S大（文）

図表14B－E　因子得点の大学別検定結果（第５因子「自分の専門性」）

大　学	平均均	S D	N
S大・文	－0.0133	0.9201	104
S大・理	－0.0426	0.8161	74
T大	0.2430	0.8608	139
長大	0.0468	0.8518	163
H大・一部	－0.2100	0.8917	61
H大・二部	0.1260	0.8500	115
R大	－0.0358	0.6919	181

F ＝ 2.960***

多重比較結果

T大＞H大（一部）
　　S大（理）
　　R大
　　S大（文部）
H大（二部）、長大＞H大（一部）